

## 小学校英語教育における ICT の活用について

### ICT-Enhanced English Education for Elementary School Children

山本 淳子

Junko YAMAMOTO

---

#### 1. はじめに

日本でも新学習指導要領（文部科学省 2008）により、2011年から小学校で英語が必修化となり、2009年度から移行措置期間が始まっている。これまで「総合的な学習の時間」の「国際理解」という枠組みで英語指導が各校独自に行われてきたが、内容も時間も自由に決めることができるため、熱心に指導をするところ、単なる遊びで終わらせるところなど、各校で取り組みにばらつきがでているのが現状であった。そのため、高学年で「英語活動」を週1コマ程度、全国一律に実施することとなった。

小学校で英語を教科にすることへの国民の支持率は1990年代から徐々に高まっており、今日ではさらに高まっている（小池 2004）。小池はその理由を教員や保護者らが「早く英語教育を始めることで子どもの音声と英語コミュニケーションに対する感覚が一層伸びる」ことを期待しているからだとしている。また、この早期英語教育に対する高い支持率の背後には臨界期仮説<sup>1)</sup>をめぐる議論があると推測する。さらに TOEFL<sup>®</sup> などの試験における国際比較から、日本人の英語力の低さが強調されてきたことも早期英語教育の実施に拍車をかけたのではないか。<sup>2)</sup> これから始まる外国語活動に対する保護者や社会全体の期待は、英語教育の本格的導入を目前に最高潮に達していると言えるかもしれない。

その一方で、誰が何をどうやって教えるかということについての共通認識は十分ではない。現場からは準備不足や環境の不備などから、不安の声が聞こえる。ALT (Assistant Language Teacher) の活用も行われているが、費用の面で公立小学校で ALT を常駐させることは難しい状況である。文部科学省の方針では、担任の先生が中心となって指導することになっている。<sup>3)</sup>

指導要領（第5学年及び第6学年）には「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることが……」「外国語を聞いたり、話したり……」（下線は筆者）と外国語（英語）の運用を促す記述がある。35時間（年間35単位）という限られた時間のなかで、コミュニケーションの「素地」を培うことが現場の先生方に求められている。しかしここで問題になるのが、多くの先生方は専門的に英語の指導方法を習っているわけではないということである。全国40万人いる小学校教員のうち、中・高等学校の英語の免許を取得している割合は、公立小学校で3.7%、私立小学校でも4.0%にとどまっている。専門外である英語を教えるための研修が十分行われているかということ、必ずしもそ

うではなく、決められた年間35時間分を実施するためには、教材、年間指導計画、教員について評価や研修が課題になっていることが旺文社の調べで明らかになっている（『日本教育新聞』2009.2.16）。

授業を進める上で文部科学省による「英語ノート」（2007）およびこれに準拠した指導ハンドブック（2008）を活用すれば、年間計画や指導内容の立案など、担任の先生にかかる負担が軽減されるが、これは一つの教材であり、教科書ではない。<sup>4）</sup> 利用方法も各先生に任される。これを裏返せば、ある程度自由に工夫を加えて英語指導を独自の方法で展開していくことも可能なのである。

英語の指導にあたって、クラスをまとめ意欲を持続させながらコミュニケーション活動を展開していくには、子ども一人一人をよく知っている担任が行うことが理にかなっている。必修化が決まった今、担任が中心となって利用できる資源とで効果的な指導を進めることが求められている。成功のためには、担任の負担を軽減しながら、子どもの好奇心を満たし、学びたいという意欲を高めながら英語力を伸ばす方法が考えられなくてはならない。

そこで本稿では、小学校において現在、普及しつつある、マルチメディアを含む、ICT：Information and communication technology（情報通信技術）を活用することの意義について論じたい。

通常、教室において、多数の子どもに対して教える指導者は一人である。一人一人に気をくばりつついかに効率よく、かつわかりやすく興味をひく授業を展開するためには、子どもを観察しながら、音声や動画をテンポよく提示できるマルチメディアの活用は欠かせないと考ええる。

柳（2009）は「メディア（ICT）の利用は効果的な授業を展開するためには欠かせない、教師の負担を軽くし、臨場感のある言語使用場面を児童に与える助けになる」と述べている。柳（2009）はまた、中央教育審議会の提言を次の通りに引用している。「……音声面の指導におけるCDやDVD、電子教具の活用、僻地や離島等の遠隔教育および国際交流におけるテレビ会議システムの利用など、ICTの活用による指導の充実を図ることも重要と考えられる」

このように、政府もメディアの重要性を認識しており、今後、ICTは児童英語教育の分野で一層普及していくことが予想できる。これによりネイティブ指導者・英語教育を専門とする教員が不在の場合でも無理なく、児童にとって楽しい授業を展開することが可能となる。かつてのLL教室では果たせなかった様々な機能と役割を持つマルチメディアシステム、モバイル機器などのツールの利用方法を実践と文献研究から紹介し、その可能性を探る。

## 2. ICT やマルチメディアを活用した英語学習の実践事例

### (1) DVD を用いたマルチメディア利用

筆者のこれまでの実践では主に大学生を対象にDVDの動画とキャプションを同期させた学習プログラムの実践を行い一定の効果を上げた（Yamamoto, Okura, Watanabe, 2007, 山本, 大倉2008）。このようなプログラムを文字学習を始めていない小学生に提供することはできないかと考えた。

小学生の英語学習においては、歌やゲームなどを利用したりズミカルなアプローチで楽しく英語に親しませること、四技能の中でも、話す・聞く能力を伸ばすことが第一目標になっているが（小

池編2004) 高学年(11歳、12歳)になるとピアジェが示した「形式操作期」に入り、分析的思考を持つようになるため、これまで低学年・中学年の総合的な学習の時間などで行われてきたゲームや歌、チャンツなどだけでは、高学年児童の知的好奇心を満たすことが困難となる。またそういった活動に対して照れくささが出てくるのも高学年の特徴である。そこで、高学年を対象とした、知的好奇心を満足させる教材が必要となってくる。文字を利用した学習にも興味を持つようになると言われている(國本、1998、JASTEC 関東甲信越支部 調査研究プロジェクト・チーム、1999)。

子どもが自分のペース、レベルに応じてマルチメディアに自由にアクセスできる環境を整えられれば、指導者不足の問題や、インプットの少なさの問題が解消できると考えられる。何回も繰り返し気に入った場面の映画を字幕とともに鑑賞するうちに、ナチュラルスピードの英語にもなれることが期待できる。子供向けのDVD映画をもとにして操作を単純化した使いやすく楽しい機能を持つ学習システムを提供することで、英語の読み書きに興味を持ち始めた子どもの英語学習への動機づけを行いたいと考えた。

#### 研究実践の概要

目的：国際交流を行うにあたり、マルチメディア教材を共通の学習教材として、英語学習を行った結果、子どもたちの英語の読み書きを中心とした英語活動に対する動機づけを調べた。

対象児童：新潟県内N小学校6年生23人(以下N6)

図1は使用したマルチメディアシステムの機能構造を示したものである。左上に見えるPC画面に、VIDEO領域とその直下の字幕領域、そしてその字幕データが記入されたワークシートが画面に提示される。PC画面の右にある音符マークは、学習者の保存した音声ファイルを意味する。字幕と音声ファイルは、見やすいようにビデオのタイミングに同期する。これらを制御するのが、Excelの裏で動作するScriptとなる。DirectShowとMedia Encoderのコンポーネントを利用した。エクセルを基盤として利用した理由は、(1)多くの人(教師)が使い慣れたインターフェースである(2)データの編集が自由にできる(教師の工夫を反映しやすい)(3)標準的なWindowsパソコンには導入されていることが多い(4)ブラウザほどセキュリティの制約が厳しくない、といった点である。

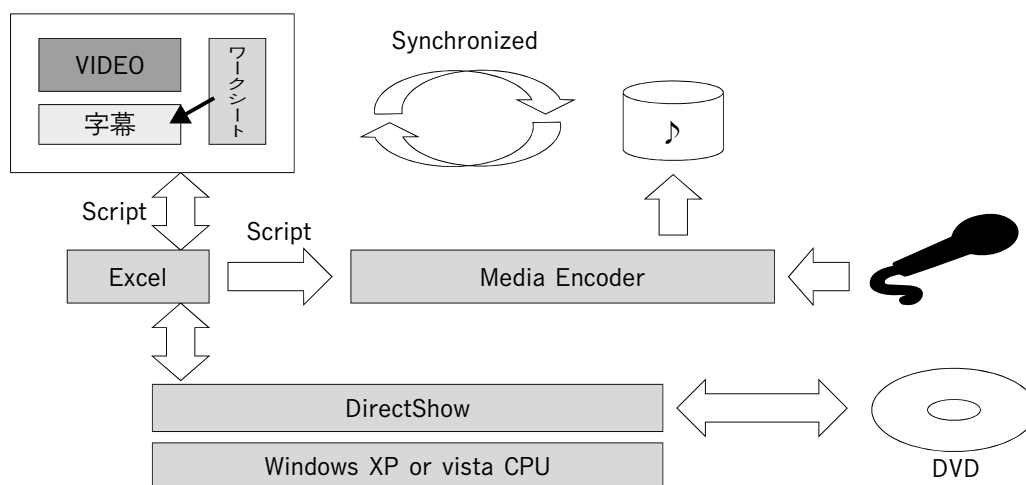


図1 DVD映画英語学習システムの機能構造

映画の選定にあたっては、子どもたちが興味を持って学習できる内容であることを重要視した。PC 学習システムを開発する上で、英語キャプション、英語吹き替えがある子供向け映画であることが必要条件であったが、そういった条件に合うのが宮崎駿作品<sup>5)</sup>であった。中でも、田舎の暮らしが美しい自然の風景の中で描かれた『となりのトトロ』(1988) は、小学生が主人公になっており感情移入がしやすいと考えた。二十年以上も前に作られていながら、いまだに根強い人気を誇るアニメであることから、内容についても分かりやすく抵抗感なく英語の練習が出来るのではないかと考えた。また日本を舞台にしたアニメではあるが、古い家屋や田舎の情景などが描かれており、現代の子どもにとって未知の部分も多く飽きさせない内容である。

この実践の結果、このような動機のもと子どもの国際交流のプロジェクトに、開発した PC 学習システムを導入した結果、日本の小学生（5、6年生）の英語学習に対する意欲が高まったことを検証できた（山本 2008）（図 2）。

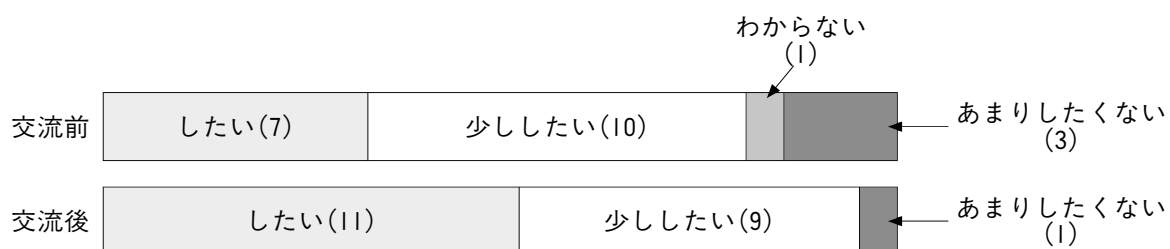


図 2 比較調査 質問 3 英語の読み書き練習に対する興味 (N 6) (n = 21)

可能であれば、リアルタイムで、日本と海外にパソコン電話ソフトの Skype(スカイプ)<sup>6)</sup>や WEB カメラを設置して音声や映像による顔が見える交流を提案したが、教育調査に訪れたインド、オーストラリアの両国の学校ともプライバシー保護に関して厳しい考え方を持っており、そのような交流方法が認められなかった。いずれの場合も両親の承諾を得なくてはならない上、両親が全員認める見込みはないとのことであった。お互いの様子を見ながら片言でも会話できる環境は理想的ではあるが、国際的な交流の場合、プライバシー保護の問題について理解を得るための対策を考えなければならない。

このマルチメディアシステムの特徴は字幕と動画が同期して見たい場面がすぐ見られる、言いたいセリフがすぐに言えるという点だが、文字に関して子どもは興味を示すものの、月に数回の英語学習では、たとえ Hello や、Sorry! などの簡単な単語でもそのキャプションに注意を向けることは難しい。結局、文字に関しては、フォーマットを見ながら名前、年齢を書いたり“ I like Totoro.”などと短い文を書いたりすることが限界であった。

小学校の実践においては、英語学習と情報教育は別々に指導されるため、英語の時間内にパソコンを使った学習を組み入れることは困難な場合が多い。DVD 映画を「教科書」して一人一人がタイトルずつ持ち、どこでも学習できる環境が理想であるが、パソコンの台数の関係で、DVD を交代で使わなければならないため、子どもにとっては使いやすい環境ではなかったことが反省点である。今後は動画を使った英語学習とメールによるコミュニケーションやウェブコンテンツによる学習を

有機的に結びつける実践を行い、その効果の検証を重ねていきたい。

## (2) 電子黒板の利用

電子黒板とは従来の黒板とパソコン、映像機器などが一体化したものである。書いたり描いたりした内容を電子的に変換することが可能であること、パソコンやDVDなどの映像を示すほかに、タッチパネルとして指導者や子どもたちが画面上に書き込みを行うことができる。また既存の画像と書き込みを同時に映し出すこともでき、各校で設置が進められている。

電子黒板と一口にいってもその機種にはいくつかあり、貼り付け型、ボード型、テレビ型の三種類がある。代表的な機器の簡単な特色は、図3の通りである。

	必要な機器	可動性	特 徴	価格帯(税込み)
貼り付け型	パソコン・プロジェクタ・スピーカー	移動しやすい	黒板に貼るため場所をとらない。タッチペンのみで操作。	10万円～15万円
ボード型	パソコン・プロジェクタ・スピーカー	移動しにくい	画面が大きく見やすい。指とタッチペンで操作可能。	40万円～50万円
テレビ型	パソコン	移動しにくい	画面が鮮明、プロジェクタを使わないので影ができない。画面の位置調整の必要なし。指とタッチペンで操作可能。	100万円以上

図3 電子黒板の種類と特徴

特徴は機種によって異なるものの、だいたいの機能は同じである。教える対象を考えた上で最適な電子黒板を選択できる。

OHP（オーバーヘッドプロジェクター）やパワーポイントなどのパソコンのプレゼンテーションソフトで、教える内容を画面上に投影した授業はこれまでも行われてきたが、電子黒板だから可能となる事柄は以下の通りである。

電子黒板の特徴をまとめると次のようになる。

- ・電子黒板のタッチパネル操作による授業は常時児童の様子を見ながら進められる。
- ・テンポよく児童の興味を持続させながら授業を進めることができる。
- ・投影した画面を付属のペンや、機種によっては指で操作することが可能になる。

授業中に児童の反応を見ながら、画面に図を加えたり、字を書き込むことが可能である。授業中に強調したい部分を拡大表示したり、色を変えたりすることができ、教えたいことを効率よく印象づけることができる。また、消すことも書き直すことも容易にできる。間違っただけで消した場合もすぐに元に戻すことができる。これにより、子どもも間違いを恐れることなく電子黒板を操作することができる。積極的に授業への参加が可能となろう。

- ・画面上の情報を保存できる。

復習させたり、ゲームのルールを説明するときなど必要なときに呼び出すことができる。何回も同じ画面が利用できる。

- ・パソコンにある音声や動画のファイルを電子黒板におくことができる。

指導者は自由なタイミングで音声を流したり、動画でわかりやすく説明したりすることができる。

- ・ネイティブスピーカーのナレーターによる正しいアクセント・発音の英語を常に確認しながら指導できる。
- ・子どもと同じ視線で授業を行える。

パソコンのプレゼンソフトを使う場合、操作はパソコンで行うため子どもたちと先生の視線が違うことになる。コンピュータと黒板の間を行き来したりする時間が生じる。同じ方向を見ながら説明できることで、表情や動き、興味や関心の的などを授業を進めながら観察することができる。

- ・自作のデジタル教材を製作することができる。

オリジナルの教材を各学校の個性に併せて制作することができる。ちなみに新潟県は全国でも、デジタル化が進んでおり、新潟市では、全小学校に一台の電子黒板とともに文部科学省が制作した「英語ノート」のデジタル版が配布され、電子黒板で英語ノートを使った指導が展開されている。好奇心旺盛で、普段、家庭でもコンピュータを使い各種ゲーム機で遊ぶ子どもたちにとって、デジタル化されゲームや動画を提示できる電子黒板は興味深く、集中力を持続させることが期待できる。

英語教育界でも、教育の効率化、児童・生徒の授業参加を促進するために電子黒板で指導する事例が報告されている（『日本教育新聞』2009.2.2、小川 2009）。なかでも小川（2009）はボード型の電子黒板を利用して自作の教材・カード・ワークシートと「英語ノート」デジタル版（英語ノートと付属の音声CDのデータがデジタル化されている）を併用しながら児童にあわせた授業を構成した実践例を紹介している。和歌山県教育センター（2008）は電子版「英語ノート」に基づく電子黒板用デジタル教材を独自に設計・開発し指導と学習上の効果を検証している。電子黒板と連動させた音読・シャドーイング活動、電子ペンマンシップ活動（流れてくる音声を聞いて発音し電子黒板上の文字をなぞる）の結果、音声から意味、意味から音声、文字から意味、意味から文字、文字から音声、音声から文字を導かせる実験ではすべての技能に伸長が見られたとしている。文字を電子ペンマンシップ活動から導入して、徐々に書くことに慣れさせることも可能である。

文字はより豊かな言語活動を促すうえ自習を可能にし習得材料をひろげる（JASTEC 関東甲信越支部 調査研究プロジェクト・チーム 1999）とされているので、このような使い方は今後ひろがりをみせると推測する。

問題点としては価格が高いことがあげられる。政府の方針では各校に一台購入することが決まり（現在は未定）黒板の電子化が進むことに疑いはない。しかし教員と児童が使い方に慣れ、十分活用するためには一教室に一台設置されることが望ましい。普及がすすみ価格が安くなることが待たれる。ただ、費用対効果を考えればさほど問題はないと言える。管・梅本（2009）が紹介しているA中学校における実験結果では、電子黒板を利用して授業を行った場合と電子黒板を利用せずに授

業を行うために絵カードなど教材を手作りした場合とで、準備に要した時間と費用を比較し、電子黒板を使った場合の方が、明らかに労力も費用も節約できることをデータで示している(図3)。また、同校で、デジタル教材を利用した場合に学習への動機付けが高まったことが報告されている。これは中学校一年生の実践例だが、好奇心が強く何にでも興味を示す小学生においても同様の結果が得られることを期待したい。電子黒板の特徴を生かした授業を行い、提示方法を工夫したりすることをいとわなければ「元が取れる」までにそれほど長い時間はかからないと考えられる。

観点 ( ) 内は満点	理解(50) (聞く(30)/読む(20))	表現(20)	言語(30)	期末素点(平均)
電子黒板を利用したクラス	34.8 (23.5/11.3)	11.6	18.4	64.8
電子黒板を利用しなかったクラス	32.9 (22.3/10.6)	6.5	18.3	57.7
差	1.9 (1.2/0.7)	5.1	0.1	7.1

図4 2学期期末テスト結果 (A 中学校第一学年266名)

### (3) デジタルフラッシュカードの利用

文字を教えていない小学校において単語を習得させる場合、フラッシュカード(絵カード)を使うことが一般的である。フラッシュカードというのは、絵とそれを補助する字が書かれたカードをめくりながら学習者に提示して、その学習を促進するツールである。フラッシュカードは小学校の英語学習においては単語だけでなく、さまざまなゲームのために欠かせない道具である。(山本・大和田 2004)。しかしこれらを手作りするには多大な時間と労力がかかる。教える教科が英語だけではない小学校の教員にとって準備にかかる時間はできるだけ短い方が望ましい。

その問題を解消すべく、デジタル化されたフラッシュカードを利用する小学校が増えている。従来のフラッシュカードをデジタル化することによって、新しい単語をパソコンを使って提示することができる。これまでのフラッシュカードでは後ろの座席の子どもに見えにくい、カードの大きさが教室に合わないなどの問題が生じる場合があったが、デジタルカードはその心配はない。

デジタル版のフラッシュカードを利用する場合、無料でダウンロードすることと、パソコンソフト教材として購入することができる。前者の場合、費用をかけず、必要なカードのデータをダウンロードできる。後者の場合でも初期費用はソフトの内容や種類によって様々な価格が設定されている(4,800円~39,900円)。デジタルフラッシュカードの利点を以下にまとめる。

- ・動画にしたり音声をつけたりすることが可能になる。
- ・サイズや色をかえたりなど、加工ができる(そのためのソフトが必要な場合があり)。
- ・場所をとらない・持ち運びに便利。
- ・劣化しない。

「英語ノート」デジタル版に準拠している教材がほとんどなので、すぐに授業に活用できる。多数の教材から特に小学校の教室向けに開発されたデジタルフラッシュカード教材についていくつか紹介する。

① 無料

- ・「英語カード.com」の中の「Tom's World 英語絵カードテンプレート集」

[http://www.eigo-card.com/store/product\\_info.php/cPath/98/products\\_id/252](http://www.eigo-card.com/store/product_info.php/cPath/98/products_id/252)

この中で、週ごとにジャンルが変わる「今週の無料ジャンル」と、常時、ダウンロードできるファイルが73と、自作用のテンプレートファイルも5種類用意されている。

- ・「旺文社学校英語ハピラボ」/旺文社

[http://hapilab.obunsha.co.jp/material/e\\_card.html](http://hapilab.obunsha.co.jp/material/e_card.html)

動物シリーズ、くだもの食べ物・飲み物、野菜、スポーツ、挨拶、教科、数、形、服装、文房具、建物、12ヶ月、乗り物、曜日といった様々なジャンルに別れていて、それぞれのジャンルから数多くの単語カードをダウンロードできる。このカードのよいところは複数にできるものについては、すべて複数のカードがあるということである。日本語の単語が複数になっても変わらないために、初心者にとっては理解しにくい複数の感覚を養うのに、この絵カードは最適である。また、sheep や glue などが不可算名詞であること、pants や glasses が通常、そのまま複数で理解することなど複数形に関するきまりがカードそのものを書いてあるので教える側にとっても習う側にとっても明快である。またこのサイトからは、ほかにもインタビューカード、ビンゴカード、単語クイズシート、ABC 紙芝居、ふりかえりカード、アルファベットカードなどゲームや復習に使える素材も多数用意されている。ABC 紙芝居には音声も収録されている。

② 有料

- ・「Tom's World 英語絵カードテンプレート集」/サッコグラフィクス

[http://www.eigo-card.com/store/product\\_info.php/cPath/98/products\\_id/518](http://www.eigo-card.com/store/product_info.php/cPath/98/products_id/518)

ジャンルごとの絵が納められた CD に加え、「英語ノート」に収録されている、すべての単語を網羅したデータ全集が販売されている。(小学校英語 絵カードデータ全集 14,700円)

- ・フラッシュカードメーカー/アプリコット

<http://www.royalbooks.jp/docs/FlashCardsMaker.html>

これは、絵カードの素材が867種類収録された CD-ROM である。文字を入力すると自動的に四線が現れるので、アルファベットを書く練習をさせる際に役に立つ。アクセントやリンキングの記号も入力可能である。文字の色を変えたり、絵の大きさを変えたりもできるのでオリジナルの絵カードを作成できる。(10,500円)

- ・小学校のフラッシュ英単語/チエル

<http://www.chieru.co.jp/products/flash-eng/index.html>

普通教室でプロジェクタで映し出し、クラス全員に見せることを想定して作られたデジタル教材である。印刷もできる。名詞編(550)、動詞、形容詞編(270)、英語表現編(270)のフラッシュカー



ドがある。(個人ライセンスが4,800円(税込) 校内サイトライセンスが23,800円)

- ・わくわく英単語 フラッシュエキスパート／内田洋行

<http://www.uchida.co.jp/company/news/press/090427.html>

一般的なカテゴリによる分類に加え、「英語ノート」のレッスンに対応した単語が約1,000納められている教材である。学校単位の販売を目的としていて、同じ学校内のコンピュータであれば何台でもインストールして使うことができる。(39,900円)

#### (4) インターネット配信型・市販型などのデジタル化された教材

ほかに、小学校教室向けのオンライン教材がある。

- ・「えいごクラブ」／コスモトピア

<http://www.gakukura.jp/engclub/>

校内 LAN 整備に合わせた仕様になっている。パソコンによる教材のほか、プリント学習のための素材も提供されている。パスワードでサイトにアクセスしてこれらの教材を受け取る仕組みである。

(年間使用料教師用 1 ライセンス 60,000円、学校ライセンスパック 280,000円)

上記で紹介した教室向けのカード教材やオンライン英語教材は有料・無料とも、多数のサイトで提供されている。教える側が、対象の子どもたちのレベルや予算に合わせて、優れた教材を選ぶことができれば、指導の幅がひろがり効果も期待できよう。

### 3. 個人学習を促進する環境作り

今後、日本人の英語力の底上げを目指すには、授業以外に子どもたちが休み時間や放課後、英語クラブ、家庭などでも英語に触れられるような環境を整えていくことが重要になってくるだろう。そのために、一斉授業用に加えて、個人向けの小学生用教材の充実も考えていかななくてはならない。子どもがいつでも自分たちのペースで学習を進められる環境を整えることは自立した学習者を育てる上で非常に重要なことであると考え。各学校で以下のような学習環境が整備されれば、授業との相乗効果が望める。

#### (1) 学校のコンピュータ室の開放

パソコンや、各種英語学習ソフト、DVD や CD などの視聴覚教材が充実したメディアスペースを放課後や休み時間などに子どもたちに開放している学校が増加することが望ましい。ソフトについては貸し出しできる教材については、図書と同様に扱い、自ら学習したいという意欲を育てたい。

#### (2) 学校ホームページ (HP) における教材の提供

学校 HP 上にデジタルコンテンツのリンク集を作ったり、デジタル絵カードの教材をダウンロードできるようにしたりするなど、家庭でも自由に英語学習ができる環境の整備も大切である。これにより効果的に個人の学習を進めることが可能となるであろう。

## 4. まとめ

デジタルの時代に、コンピュータをはじめとする ICT を学校の英語教育に活用することは様々な面で有効である。これを活用することで、担任一人では時間も労力もかかる指導を効果的に行うことができる。また工夫次第で児童の興味・関心を引き出すための工夫を加えることが、ICT では可能である。こういった教材の充実が、小学校における英語活動を成功させるカギになると言っても過言ではないだろう。

ただし、いうまでもなく教えるのは子どもたちとコミュニケーションを行う相手、つまり担任ら指導者で ICT が教えるわけではない。菅、梅本 (2009) も「言語教育としてのコミュニケーション活動は人と人との交わりから向上していくものである。くれぐれも電子黒板 (デジタル) を過信しないことである」と述べているほか、菅 (『日本教育新聞』2009.2.2) は「機械を使う人・機械に使われる人」にならないことだ。教員はあくまで活用する人である。機械を動かす人になっては本末転倒である」と述べている。確かに、ICT は担任だけでなく、子どもたちが担任や友達と英語でコミュニケーションを行うときのための便利な道具でしかありえない。こういったテクノロジーを、人と人とのコミュニケーションの円滑化のためにどのように活用していくか、理想的な活用の仕方についてさらに実践を重ねていきたい。

---

### 注：

- 1) 言語を習得するのに最適な時期があり、それを超えると完全に習得することが困難になるという内容である。もともと「臨界期仮説」は動物行動学からくる概念である(樋口)。それを言語習得にもあてはめたことで知られるのが Lenneberg (1967、樋口 (2005) の引用による) で彼は脳の外傷を原因とする言語機能の喪失や回復のパターンが年齢と関係していることに注目して、言語習得は思春期を境に難しくなるとした。
- 2) 四技能を総合的に判断する TOEFLR<sup>®</sup> (Test of English as a Foreign Language ETS) における日本人の平均点はアジア諸国のなかで最下位に近い。最近の TOEFL iBT (Internet Based Test-これまでの CBT (Computer Based Test) にかわる方式) では、36カ国のなかでデータがある30カ国のうち、日本は120満点中65点でラオス、モンゴルと並んで下から2番目(最下位はカンボジアの63点)である。ちなみに北朝鮮は69、韓国は77、中国は78点である。(TOEFLR<sup>®</sup> 2007) Test and Score Data Summary for TOEFLR<sup>®</sup> Internet-based and Paper-based Tests January 2007-December 2007 Test Data (PDF 形式/580 KB) 日本以外の国々は英語ができるエリートの受験率が高いという指摘があるが、実際は人口10万人あたりの受験者数は韓国や台湾の方が日本より多く広範な学習者が受験している (バトラー後藤 2005)。
- 3) 文部科学省の方針としては、ALT や補助教員の協力は可能だが、基本的に担任が主導して教えることとしている。主体的な立場である担任教員のなかで英語教員の免許状を取得している先生は少数派で、実際に英語は不得意な先生が多いのが現状である (小池編 2004)。バトラー後藤 (2005) の指摘にある通り、英語専科の教員の育成、英語の堪能な地域の人材の活用、中学校、高校の教師の英語活動への参加促進を本格的に進めなければならないだろう。また ネイティブスピーカー指導者はコスト高になる傾向にある。また ALT らの採用については、各教育委員会に委ねられており、財政状態によって各地でその配置状況に差が出るのが予想される。また、母語話者であればよいという問題ではなく経験の度合によって研修が必要な場合もあり、費用対効果を考えなければならない。
- 4) 文部科学省のサイトにある「英語ノート」構成案 (2008 文部科学省) は、コミュニケーションの場面 (あいさつ、道案内、家庭や学校での生活、地域の行事など) とコミュニケーションの働きの例 (相手との関係を円滑にする、事実や考えを伝える) と二つの柱で成り立っている。よく使われる表現、身近な暮らしに関する表現を学ぶこと、自分の考えを発信したり、相手の行動を促すコミュニケーションの仕方を学ぶこと、など大切な要素が網羅されている。これらが全

部で9レッスンあり、レッスン1が3時間、レッスン2～9が4時間ずつで、合計35時間となる。

- 5) 2年から4年ごとに長編作品を制作するスタジオジブリの創設者で、今回使用した『となりのトトロ』(1988)のほか『天空の城ラピュタ』(1986)『魔女の宅急便』(1989)『もののけ姫』(1997)『千と千尋の神隠し』(2001)『ハウルの動く城』(2004)『崖の上のポニョ』(2008)といった人気作品のアニメーション監督である。
- 6) Skype 公式サイトで無料でダウンロードできるソフト。市販されている WEB カメラをお互いに接続すれば顔を見ての通話が可能となる。パソコン同士であれば料金はかからない。

## 参考文献：

- Yamamoto, J. & Okura, T. & Watanabe, Y. (2007). Class Research on Learning Methods in Movie-based Computer Assisted Language Learning *Journal of Multimedia Aided Education Research*, vol. 3 No. 2, 125-136.
- 小川恵子 (2009). 「スマートボード」を使った授業 『英語教育』第58巻第8号 23.
- 大和田眞智子、山本淳子 (2004). 『小学校の英語 明日から使えるゲーム55』東京：三省堂.
- 英語ノート指導研究会 (2008). 『英語ノート1、2 完全対応指導ハンドブック』開隆堂.
- 管正隆、梅本龍多 (2009). 『「英語ノート」対応電子黒板活用ガイドブック』東京：旺文社.
- 小池生夫 (監修) SLA 研究会 (編) (2004). 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』東京：大修館書店.
- 小池生夫 (編) (1994). 『第二言語習得研究の現在』東京：大修館書店.
- JASTEC 関東甲信越支部 調査研究プロジェクト・チーム (1999). 「子どもの言語習得と文字—日本の子どもの英語学習における文字の役割について」『日本児童英語教育学会研究紀要』 37-53.
- バトラー後藤裕子 (2005). 『日本の小学校英語を考える』三省堂.
- 樋口忠彦他 (編) (2005). 『これからの小学校英語教育—理論と実践—』東京：研究社.
- スタジオジブリと徳間書店 (1988). 『となりのトトロ [DVD]』.
- 柳 善和 (2009). 「小学校でのメディア活用法」『英語教育』第58巻第8号 16-22、大修館書店.
- 文部科学省 (2007). 英語ノート1、2.
- 文部科学省 (2007). 英語ノート1、2 指導資料.
- 文部科学省 (2008). 小学校学習指導要領—小学校英語活動.
- 山本淳子 (2008). 『異文化 DVD 教材を用いた CALL システムによる児童英語教育の実践』 科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書 (課題番号18520443).
- 和歌山教育センター小学校外国語活動研究チーム (2008). 『英語ノート』に基づく ICT 教材を用いた小学校外国語 (英語) 活動に関する実証的研究 学びの丘研究紀要 4 1-35.